

ワンポイント・ブックレビュー

ピエトラ・リボリ著 雨宮 寛+今井章子訳

「あなたのTシャツはどこから来たのか？」東洋経済新報社（2007年）

著者のいう「Tシャツ物語」であるとするこの書は、マイアミで手にした一枚のTシャツから始まり、その原料生産国である南部テキサスの現場を通してアメリカの綿生産の歴史を辿り、既にしてグローバルゼーションの原理を形成していることを見るのである。

米国綿が、過去200年にわたって生産高、輸出高において一度もトップを譲ったことがないのはなぜか。そこには、長い歴史の中で培われた綿農家の企業家精神と独創性があり、複雑な再利用と価値創造の過程があった。彼らは繰綿工場、搾油工場、繊維工場、圧縮工場までも所有し、世界市場に立ち向かう力を手にするとともに綿から巧みに搾り出したわずかな利益までも確実に自らの収入にしてきた。そして、何よりも米国綿が長期にわたって支配してきた背景には産官学の協調関係の構築があり、そのことによって天候から価格までさまざまなリスクを納税者に転嫁してきたというまさに政治力の存在があるという。

Tシャツが綿の生産地テキサスから中国の繊維工場に送られた後、過酷な「女工哀史」の世界で加工され、アメリカに帰ってくるまでの過程はグローバル化、搾取工場、底辺への競争の中で他方で民主化、環境、労働条件の改善等をつくり出していることであった。

グローバルゼーションについてはグローバル資本主義時代の出現ともいわれ、今日の時代を語る流行語にもなっている。そして、一般の人々が思い描いているものは、人、物、金、情報等の国境を越えての移動であり、自由な競争市場化というものであるだろう。

しかし、著者が一枚のTシャツを買ったことによって、始まるTシャツを通して見えたものは、グローバルゼーションが、今日的な現象でもなければ、国境を越えることによって、国家とも、政治とも無縁に広がる世界でもなく、資本の気ままな自由ということでもないことであった。また、グローバルゼーションが持つ負の側面として語られる富の偏重、貿易不均衡、格差、アジア・アフリカにおける生産工場の劣悪な労働環境といった問題についても、単純な善悪の関係としてではなく、カール・ポランニーのいう「二重運動論」(市場の力は市場から保護されたいという需要に見合う)として見ていることである。アジア・アフリカにおける貧困、搾取工場に縛りつけられる中国の女性たちの問題は、市場競争の結果ではなく政治的な疎外からくるものであると分析している。つまり、相互が協力しあう関係の中で、補助金、民主化、貿易交渉への参加といった、よい方向に向けて進展を生み出していることであるとしている。そして、Tシャツの運命を左右したのは、市場競争というより、政治であり、歴史であり、競争を避けるための創意工夫であったという。

その政治力と言えば、70年の日米繊維交渉を思い出すことができる。結局、沖縄返還との取引によって解決したが、アメリカ綿業界の政治駆け引きが、今日でも世界貿易に大きな影響力を及ぼしているのである。

著者が一貫して主張しているのはグローバルゼーションとは市場の競争というよりは政治力の結果であるということである。これは、今まで自分が持っていたグローバルゼーションについてのイメージを覆すものであり、エキサイティングな内容を示すものであった。一読をすすめたい書である(M・K)。